左京区更生保護協会会長賞

友達がいること

京都市立大原小中学校九年　八木　理帆

「うれしかったこと
ぼくがいままでに
一番うれしかったことは
友達がいたことです」
（『あふれでたのは優しさだった』寮美千子）

この詩は、奈良少年刑務所に収容されている子どもが書いた詩だ。私はこの詩を見た時衝撃だった。刑務所に入っている子が書いたようには思えなかったからだ。なぜなら、私の刑務所に入っている人のイメージは、怖くて、頭が狂っているような人だったからだ。

こんなに素直で優しい詩を書くことは、私のイメージの真逆だった。私がこの詩から伝えたいことは、悪いことをする人はみんなが絶対に怖い人ではないということだ。悪いことをしたのには理由があるはず。罪を犯さないために周りの人を頼れば、解決できたかもしれない。

私にもこんな経験がある。私は、人間関係がうまくいかなかった時、人に伝えることができなかった。しんどくて、そんな自分にイライラし、うまく自分をコントロールできなくなった。でも、そんなとき先生が

「何かあった？」

と声をかけてくださり、悩みを打ち明け解決することができた。私はこのとき、身近な人に頼ることは大事だと感じた。

一人で抱え込まずに人に相談することで、解決はできなくても、「頼れる人がいる」という安心感があり気持ちが楽になると思う。私が悩んでいたとき、自分の気持ちをコントロールできないままだと、過ちを犯していたかもしれない。人に頼ったことで解決できた。

また、私は今までボランティア活動で、広い視野を持ち世界に目を向けることを大切だと思っていた。でも、何より大切なのは身近な人に目を向けることだと気付いた。世界の人を救うことはもちろん大切だが、自分の身近な人を救うことは、社会を明るくすることにつながる。それは些細な一言でいい。

「大丈夫？」

と一言かけるだけで、その人にとっては嬉しいことだと思う。私自身も悩んでいたとき、声をかけてもらって、私には頼れる人がいることに気付き安心したからだ。

私は「奈良少年刑務所」に収容されてしまった子どもたちも、周りの人を頼ることができていたら解決できたと思う。だから、罪を犯した人だけが悪いのではない。罪を犯す前に、その人の異変に気付き、サポートすることができなかった周りの環境にも問題があると私は感じた。信頼できる人間関係を作る場所を大切にしたい。

そこで、そんな関係を作れる場所はどこかと考えた。私は「学校」だと気付いた。学校は友達と一緒に勉強したり、遊んだり、ときには喧嘩もするかもしれない。でも、そんな濃い時間を過ごせるからこそ信頼できる関係を作れるのだと私は考えている。

私の学校は小中一貫校で、九年間たった五人という少人数で濃い時間を過ごしてきた。今年で卒業となってしまう。でも、この九年間でみんなと作った五人の絆は卒業しても繋がっていくと思う。高校に行っても、大人になっても安心して頼り合える「親友」だ。

皆さんも頼り合える「親友」を作ってほしい。学校嫌いにならず、毎日楽しく通うことで、自然と友達ができて、頼り合える関係になれると思う。「奈良少年刑務所」の子どもが書いた詩のように「友達がいてうれしい」と思ってほしい。

私は、身近な人に頼ることで犯罪が少ない、明るい社会になると考えた。だから、学校でずっと頼り合える関係を作ってほしい。犯罪者が少なくなり、笑顔あふれる社会を実現したい。